

国立大学法人富山大学次期学長候補者選考について

[選考経過]

国立大学法人富山大学学長選考・監察会議は、令和4年6月29日「国立大学法人富山大学学長候補者の選考の基準」及び「国立大学法人富山大学にふさわしい学長像」の公示により、学長候補適任者の推薦を求め、9月12日（月）開催の会議において、推薦のあった齋藤 滋 氏、堀田 裕弘 氏の2氏を学長候補適任者に決定した。

続いて、10月17、19、21日に杉谷・高岡・五福の3キャンパスにおいて2氏による公開討論会を実施し、10月24日から28日にかけて、学内意向調査を実施した。

本日（11月2日（水））会議を開催し、学長候補適任者に対する面接を実施した上で、富山大学にふさわしい次期学長候補について審議を行った。審議に当たっては、推薦時の提出書類（履歴、所信等）、公開討論会、意向調査の結果等を参考に、「国立大学法人富山大学学長候補者の選考の基準」及び「国立大学法人富山大学にふさわしい学長像」に照らして、総合的に判断を行った。

これによる次期学長候補者選考の理由は以下の通りである。

[選考の経緯と理由]

人類の持続的な発展が問われる中で、新型コロナウイルス感染症の影響長期化や国際情勢の不安定化で世界は分断し、わが国においては人口減少と地方の衰退、経済やエネルギー問題が深刻である。このような時期に、人材の育成と知の創生を預かる高等教育の役割は愈々大きい。

富山大学は、芸術文化学部をはじめとする9つの学部と約1万人の学生を擁する、日本海側にあるわが国の基幹大学である。高等教育および地方創生の中核拠点として、また、北陸から東アジア、さらには世界に展開する知のゲートウェイとしての役割が期待される。

3大学統合の後、痛みを伴うものの、教養教育の一元化と都市デザイン学部の創設に続き、学士課程と大学院課程等が整備され、これから教育・研究・社会貢献を実践することで、大学運営の実質化が図られようとしている。しかしながら、運営交付金の削減や18歳人口の減少等、大学を取り巻く環境は極めて厳しい。また、科学技術の活用と市場のグローバル化をもって高度に発展した工業社会は、革新の創出と本来あるべき姿の喪失のはざままで揺れ動き、社会のための大学の先行きを不透明にしている。

次期学長の役割は、地域から世界に展開する強みと特色のある大学を目指すべく、その機能の最大化に向けたリーダーシップの発揮である。それは、総合大学としての多様な専門分野の特性を活かした、教学運営と法人経営の両立に他ならない。さらに、

社会の大きな変化を汲み取り、問題解決に向けて果敢に取り組む大学ガバナンスであろう。

学長選考・監察会議は、以上のような考え方で、次期学長候補者の選考を進め、人格・識見・責任感や教育・研究・社会貢献に対する実績と情熱に加えて、企画構想力、課題解決や改革に向けた実行力、さらには法人経営に係る知見を問うたところである。6月に始まる一連の作業は公示等の情報開示をもって進められ、3日間にわたる3会場での公開討論会の開催は、学内構成員の意向調査への参加を促し、大学運営に対する意識の共有化が図られたところである。

学長選考・監察会議は、以上のプロセスと考え方で学長候補者の選考を進め、次期学長候補として、齋藤 滋 氏が適任であると判断した。齋藤氏は現職の学長として、全学的に痛みを伴う改革を進めてきたが、それは本学の厳しい状況を乗り越えるための必至の改革である。次の4年間において、全学構成員と意思疎通を図りながら、更なる成果を挙げられることを期待したい。

先行きが不透明で混沌とした時代にあって、国立大学法人富山大学が一層発展することを確信し、地域社会をはじめとするすべてのステークホルダーの皆様に、次期学長候補者の決定をここに報告する。

令和4年11月2日

国立大学法人富山大学学長選考・監察会議